

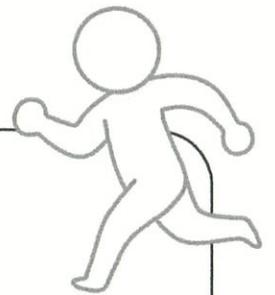
# ①子どもと向き合うための環境整備

グループ

【現状】

- 個別教育計画の書き方のマニュアルはあるが、実際の目標や支援方法は一から考えていることが多い
- 各学部や学年でとっているアセスメントの種類や活用状況に大きな違いがあり、系統的な目標設定ができていない？

段階や実態ごとに見やすい  
個別教育計画のテンプレートを作りたい！



研究

【ゴール】

- 各部門・学部で取り組んでいるアセスメントと個別教育計画の各項目を把握・整理し、個別教育計画作成にあたって必要なアセスメントを表にまとめる。
- アセスメント項目表やその他個別教育計画作成に役立つ書籍等を提示する。



## テーマ設定の理由

令和4年度の学校評価目標において、「児童生徒一人ひとりの発達段階や障がいの状態に応じた学習課題の設定、指導方法の工夫、教材・教具の開発」が掲げられ、児童・生徒が「すぐにわかった!」「自分でできた!」と実感できる授業の実践が求められている。

しかし現状では、個別教育計画のマニュアルはあるものの、目標や支援方法は一から考えることが多く、学部・学年間でアセスメントの種類や活用状況に差があり、系統的な目標設定が困難となっている。そのため、段階や実態ごとに見やすい個別教育計画テンプレートの作成が必要である。

---

## 研究内容

### A 部門 (小学部低学年・施設訪問)

- 使用アセスメント:
    - 『学習到達度チェックリスト2019』
    - 『重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト』(広島県立福山特別支援学校)
  - ぐらしの目標:運動・動作、健康の保持、身体の動き
  - やりとり・かかわり:国語(受け止め・対応、表現・要求、見ること/操作)、要求表出、人間関係
  - 学び・仕事・余暇:算数(外界の知覚認知)、聴覚、言語理解・表出、触覚、視覚
  - 検討した内容の整理:
    - 「A部門アセスメント項目表」
    - 「自立活動学習参考表」(課題→目標→支援の流れを明確化)
- 

### B 部門 (小学部・中学部・高等部)

- 使用アセスメント:
  - 『着替えチェック表』
  - 『日常の行動分析表』
  - 『NCプログラム』
  - 『太田ステージ』
- ぐらしの目標:着替え、支度、衛生、食事、排泄、移動
- やりとり・かかわり:音声表出、コミュニケーション、対人関係、集団参加
- 学び・仕事・余暇:学習活動、職業意識、余暇活動、ぐらしの技術
- 検討した内容の整理:
  - 太田ステージは発達段階の把握に有効だが、個別教育計画の項目ごとの目標設定には工夫が必要。
  - 関連文献・書籍を活用し、段階ごとの目標設定を支援。

## ■ 成果と考察

- 各部門で使用しているアセスメントを整理し、個別教育計画作成に必要な情報を表形式でまとめたことで、目標設定が系統的に行えるようになった。
  - 川端文庫に「個別教育コーナー」を設置し、教員がアセスメントや参考書籍にアクセスしやすくなった。
- 

## 🕒 課題と今後の展望

- 使用するアセスメントは実施時期を、学部・学年で周知していく必要がある。
  - 「見やすいテンプレート作り」の観点では、発達段階や障害の状態に応じた視覚的・構造的工夫が今後の課題。
  - 今後は学校全体でテンプレート作成の取り組みを継続・周知し、誰でも使いやすい形に整えていく必要がある。
-

【A部門】

くらし	<p>【目標に関連する項目】</p> <p>①覚醒、睡眠、健康状態、体温調節、呼吸、排痰、食事、排泄、清潔、衛生                  ②病気の理解・改善、進行防止、服薬                  ③身体各部の状態の理解、養護方法、症状の進行防止                  ④障害特性の理解、環境の調整                  ⑤病気の予防、体力の維持、食の管理、生活環境の整理</p> <p>⑥原始反射、筋緊張、頸部、膝臥位、座位、四肢這い、膝立ち、立位姿勢変換                  上肢や手指                  ⑦補助具の活用（姿勢保持、食事、排泄、更衣）                  ⑧動作（食事、排泄、更衣、手洗い、歯磨き）                  ⑨移動（寝返り、這い、歩行、補助具の活用、車椅子）                  ⑩姿勢（机上での作業、上肢・手指・下肢を使った動作）</p> <p>⑪運動・動作                  ⑫生活</p>	<p>「自立活動」 健康の保持</p> <p>「自立活動」 身体の動き</p> <p>「学習到達度チェックリスト 2019」</p>
-----	---	--

やりとり・かかわり	<p>【目標に関連する項目】</p> <p>①不明確な表出、明確な表出、大人への注意、期待反応、声のやりとり、応答性、大人への積極性、物への働きかけ、要求の芽生え、Yes/Noによる要求、指差し理解・要求、注意獲得、要求手段の多様化、要求の具体化・明確化、言語を伴う要求、自己主張の芽生え、二語文での要求</p> <p>②快反応（働きかけ、声）、大人への注意、特定の支援者への気づき、大人への積極性、感情の分化、物を介したやりとり、気づき（他者意図、自分）、他者意図の理解、やりとりの拡大、共感性、社会性、共感性の高まり、他の子への興味、自己意識、社会性の高まり</p> <p>③受け止め・対応、表現・要求、見ること、操作</p>	<p>「重度・重複障害児の アセスメントチェックリスト」 要求放出</p> <p>「重度・重複障害児の アセスメントチェックリスト」 人間関係</p> <p>「学習到達度チェックリスト 2019」 国語</p>
-----------	---	---

①聴覚刺激への気づき、音への快反応、音の変化への気づき  
声への快反応、聴覚刺激への注意の高まり、音への興味  
声の変化への気づき、音の方向性への気づき  
特定のフレーズへの気づき、音楽への快反応  
特定フレーズへの意味付け、興味の拡大（聴覚）  
言葉の理解への芽生え

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
人間関係

②名詞等の理解、言語指示への応答、二語文の理解、質問  
への応答、動詞・形容詞等の理解、理解語彙の増加  
カテゴリー概念の芽生え

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
言語理解

③音声模倣、発語の芽生え、言葉の模倣、表出語彙の増加  
言葉での要求、場面にあった言葉の活用、二語文の表出

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
言語表出

④触覚・固有覚・前庭覚への気づき、感触の変化への気づき  
手・物への気づき、把持、単純な操作、リーチング  
単純な因果関係の理解、探索的操作、因果関係の理解  
操作時の高まり

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
触覚

⑤視覚刺激への気づき、注視、追視、物への気づき  
リーチング、興味の拡大、因果関係の理解、物の永続性  
探索的行動

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
視覚

⑥空間認知の芽生え、始点と終点の理解、手指の活用  
視覚情報の活用、道具の使用、空間認知の高まり

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
視覚・操作等

⑦保存の概念、比較の概念、図形概念の芽生え、数・量の  
芽生え、数・量概念の高まり、カテゴリー概念の芽生え

「重度・重複障害児の  
アセスメントチェックリスト」  
数量・概念

⑧視覚、聴覚、触覚、前庭覚、固有覚

⑨視覚への過敏性、視覚的な注意の集中、聴覚の過敏性  
聴覚的な注意の集中、触覚の過敏性、味覚の過敏性  
嗅覚の過敏性、認知の特性への対応、得意な認知方法  
の活用

⑩視覚の補助・代行手段、聴覚の補助・代行手段

⑪ボディイメージ、目と手の協応、両側統合・ラテラルティ  
運動企画

⑫知覚（視覚、聴覚、触覚）、記憶（視覚、聴覚）

把握（位置や空間、時間）、図・地の弁別、恒常性の知覚

「自立活動」  
環境の把握

## 【B部門】

くらし

・目標に関連する項目

〈B 小〉

着替え…着替えチェック表

支度、健康(移動等)、衛生(手洗い・歯磨き等) …日常の行動分析表

〈B 中・高〉

着脱、食事、排泄、移動…太田ステージ生活スキルチェックリスト

基本的な生活習慣 …個別の指導プログラム

やりとり・かかわり

・目導に関する項目

〈B 小〉

理解、表出、集団行動、対人関係、コミュニケーション …NC プログラム

〈B 中・高〉

コミュニケーション …太田ステージ生活スキルチェックリスト

自己・対人・コミュニケーション…Stage 別国語に関する発達課題

集団参加 …個別の指導プログラム

学び・仕事・余暇

・目標に関する項目

〈B 小〉

学習活動、係活動、余暇活動 …NC プログラム

〈B 中・高〉

学習、職業意識、集団参加、くらしの技術

…Stage 別国語に関する発達課題

…Stage 別数学に関する発達課題

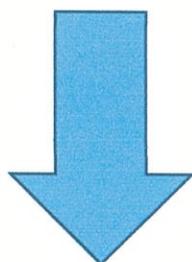
…個別の指導プログラム

## <アセスメント項目表の活用方法>

### ①該当する部門学部の アセスメントを確認

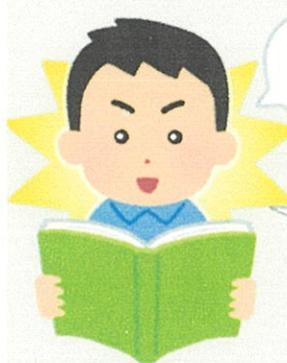


B小児童の学習についてはNCプログラムでアセスメントをとっているんだな…



### ②アセスメント項目表や

参考書籍を見ながら実態把握をし、  
個別教育計画を作成する。



10までの数唱について  
目標を立てたいときは  
NCプログラムの『8 数』  
を見ればよい！

【現状】

- ・給食に興味を持ってほしい!
- ・食育の授業×給食の幅を広げたい。
- ・育てた野菜・授業で取り扱った食材を給食で出す機会を増やしたい。

学校給食を中心とした食育を進めたい!

研究

【ゴール】

- ・「ワークアート」や「授業」で育てた作物を収穫し、食材に直接触れたり、家庭に持ち帰って食べる機会を作ったりする。
- ・授業の中で給食で出ている食材のクイズを行う。
- ・授業で収穫した作物で野菜スタンプを行う。
- ・栄養士による出前授業を行う。

◆設定の背景

- ①給食に興味を持ってほしい。
- ②食育の授業×給食の幅を広げたい。
- ③育てた野菜、授業で取り扱った食材を給食で出す機会を増やしたい。

◆研究のゴールイメージ

- ①ワークアートで育てた作物を収穫し、食材に触れたり 家庭に持ち帰って食べる機会を作ったりする。
- ②給食で使われている食材のクイズを授業で出す。
- ③授業で収穫した作物でスタンプを作る。
- ④栄養教諭の出前授業をする。

研究方法・実践記録・課題
学校給食と連携してできる食育の仕組みづくりを検討した。
成果と考察
<p>◆A 高等部1～3年生(Ⅲ類型)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・夏野菜を収穫する頃、ワークアートの授業で栄養教諭に参加してもらった。</li><li>・収穫する野菜のクイズや取った野菜がいつの給食で出されるか授業で話題にした。</li><li>・栄養教諭が参加した日、ミネストローネでトマトが使用されたので、その話もしてもらった。</li><li>・繰り返し収穫を行ったり、給食のメニューで育てた食材の名前を確認したりしたことで、野菜の名前を覚えた生徒やクイズを通じて野菜の名前を当てる生徒がいた。授業で食材を調理する機会が少ないので、調理具の使い方やその調理具を使って給食になる過程を知る機会を増やすと、給食や食材への興味がより繋がるように感じた。</li></ul>
<p>◆B 小学部4年生、5年生</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・小学部では、学年ごとにプランターや畑で野菜作りを行った。</li><li>・トマト、きゅうり、なす、ピーマン、すいか、かぼちゃ、大根に挑戦した。</li><li>・畑やプランターでの土の感触を味わったり、耕したりした。</li><li>・たくさん実がなるように、水やりや草むしりを子どもたちは頑張っていた。</li><li>・収穫は、子どもたち一人ひとりが野菜の収穫にチャレンジした。</li><li>・収穫したもので、野菜スタンプや、育てた野菜と同じものを使って調理実習をしたりした。</li><li>・普段あまり食材を口にしない児童も、調理工程(つぶす、まぜる)を楽しむことで、自らおかわりを要求したり、食べたい気持ちから、身支度が苦手な児童もがマスクを装着したりすることができた。野菜スタンプでは、身近な野菜を日常の授業で触れる題材として児童が積極的に触れている様子が見られた。</li></ul>
<p>◆B 中学部3年生</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・1学期:【ミニトマト】プランター栽培</li><li>1学期～2学期:【バケツ稲】バケツ栽培</li><li>2学期～3学期:【スナップエンドウ】【小かぶ】プランター栽培</li><li>・ミニトマトを食することに対して、苦手意識がある生徒がいたが、生徒自身で土づくり、苗の植え替え、水やりを行い、観察記録をつけることで成長の過程をより実感できることに繋がった。収穫の時期には、毎週10個程度持ち帰ることで、元々トマトが食べられない生徒が毎日一粒ずつ食べる習慣を身に付けて食べられるようになった。</li></ul>

- ・バケツ稲は土づくりから始め、収穫までに約半年間かかった。長い期間の中で、様々な工程を経験しながら作物を育てる機会になった。収穫後も玄米にするまでに、稲を干す、脱穀やもみすり、精米など多くの工程があることを体験しながら学習することができた。
- ・スナップエンドウと小かぶは種から育て、水やりなどに取り組んだ。

#### ◆栄養教諭

- ・学校給食を中心とした食育を進めるにあたり、授業で栽培する食材を給食で活用できれば、授業と給食が連携して食育を進めることができるのではないかと考え、それらをまとめた表を作成した。表を作成したことで、授業の内容や栽培時期を把握でき、それらを参考にした給食メニューを実施することができた。また、栄養教諭の出前授業が必要なタイミングが把握しやすく、計画的な食育推進につながった。

### 現状と今後の展望

#### ◆A 高等部

- ・繰り返し収穫したことで野菜の名前や香りに興味をもつ生徒が増えた。厨房で使う釜などを実際に見たり、給食で使う食材の感触や香りを経験したりする機会を増やしたい。

#### ◆ B小学部4年生、5年生

- ・食材の栽培を中心にいき、収穫につなげることができた。学年によっては収穫から調理、野菜スタンプなどにつなげることもできた。出前授業を増やすことや、食育で使用した食材を、日常生活に関連付けながら、小学部段階の児童が興味関心をもって授業を行うことができるような題材のレパトリーを増やしていきたい。

#### ◆ B中学部3年生

- ・野菜や米などを栽培し収穫すること、生徒にとって作物を身近に感じたり食べてみたりするきっかけになった。収穫した作物を調理するなどの機会を増やしていきたい。

#### ◆栄養教諭

- ・今回の研究ではA高、B小、B中の限られたクラスでの実施となったが、今後は校内全体の取り組みとして活用していきたい。

【現状】

出来る資源はあるはずなのにはじめの一步を踏み出すハードルの高さ。  
他校や一般校ではやっているのになかなか進まない。

保護者配付物や回収物を電子化したい!

研究

【ゴール】

保護者向けにFormsアンケートを実施した。

保護者お知らせのマメール配信を行った。

(試行的な取り組みから活用範囲や課題のイメージをもてた。)

研究方法・実践記録・課題	
はじめに、現状の確認を行い、今回取り組む課題を絞った。	
(1) 保護者向けアンケートの電子化 (FORMS 活用)	(2) 家庭への配付物の電子化 (マメールの活用)
<p>○これまでの流れ</p> <p>校内の業務において FORMS を活用することはあったが、保護者に対して FORMS 等を使用したことは事例がなかった。麻生支援学校においてアンケートを電子化するという方向性がなく、他校の事例や経験を参考に麻生支援でも実施することとした。</p> <p>○実施の方法</p> <p>通常スマートフォンを使った FORMSでの選択形式回答である。</p> <p>○アンケートの種類</p> <p>身近であり、かつアンケートとして回答が容易であると思われるイベントを選び、実施した。 [以下実施した案件の例]</p> <p>① 令和6年度後半から試行されているスクールバスの GPS の活用について</p> <p>② 授業参観を行った後の感想</p> <p>③ 進路説明会の出欠席</p> <p>○実施に際しての配慮したこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報扱うことのないようアンケートの内容に関しては内容を厳選した。</li> <li>・2次元コードのみではなく、紙ベースでも回答できるようにして、どちらの返答が多いか、ということについてもリサーチする。</li> <li>・保護者の目に留まりやすい場所に掲示するとともに、口頭でもアナウンスをした。</li> </ul>	<p>○地域の学校や他の県立特別支援学校ではどのような方法で配信されているかをリサーチする</p> <p>→携帯メール連絡網や連絡網サービスアプリを活用し、お知らせやプリントの配付を行っている。</p> <p>○本校でも学校からのお知らせで活用している「マメール」にファイルを添付する形で配信できるか試験配信をする。</p> <p>→添付ファイルの表示期限が5日間であることが分かった。保護者にはデータのダウンロードやスクリーンショット等の保存方法を伝える必要がある。</p> <p>○どのような内容の配付物がメール配信可能かリサーチ</p> <p>→個人情報を含まず、全体に関わる内容のもの。月間予定、学部・学年だより、給食献立表、保健だより、あさおインフォメーションなどを検討した。</p> <p>○メール配信の取り組みについて管理職と協議、更に校内会議でも協議</p> <p>→各分掌 GL に電子化できるお知らせを確認する。</p> <p>○職員会議にて今後のメール配信実施について報告</p> <p>○保護者へ、電子メール配信についてのお知らせを配付</p> <p>→どういった内容のものがメール配信の対象となるか</p> <p>→添付ファイルの掲載期間が限定されていること注意喚起</p> <p>○マメールにお知らせ文書のファイルを添付して、送信する</p> <p>→11月初旬「あさおインフォメーション」を送信した</p> <p>→誤送信がないよう、内容、配付先、添付ファイルを手順に沿って、確認した</p> <p>→紙媒体での配付も併せて、実施した</p>

成果と考察	
<p><b>【成果】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観のアンケートでは、授業後にすぐにアンケートに回答している姿がみられた。</li> <li>・回収後の入力の手間が少なく、並べ替えをすることで集計をまとめることができた。</li> <li>・アンケートの回収率はいずれも概ね 3 割～4割だった。</li> </ul> <p><b>【考察】</b></p> <p>より具体的な意見を得ることができ、実施後すぐに回答できる環境が活きたと思う。2次元コードでの回答についての周知が進むことや取り組みが増えていくとそれに伴って回収率が上がっていくと考えられる。</p>	<p><b>【成果】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○一部のお知らせ（全体に関わり、個人情報がないもの）について、メール配信することができた。</li> <li>○既にシステム環境は整っていたため、校内合意で実施ができた。</li> <li>○メール配信されたお知らせの表示は簡潔で、スマートフォン等で、すぐに確認することができた。</li> </ul> <p><b>【考察】</b></p> <p>配付物を電子化することにより、印刷業務の削減、未配付の防止、保護者とのスムーズな情報共有に繋がると考えられる。</p>
現状と今後の展望	
<p><b>【現状】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校全体の行事などより幅広い場面では2次元コードでのアンケートができていない。2次元コードでアンケートを集約することができれば、集約する時間短縮することができ、業務削減へとつながることが予想される。併せて、集計結果がグラフとして表示されることから視覚的にもわかりやすくなる。</li> </ul> <p><b>【今後の展望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報扱うことは出来ないが、こういった内容であればアンケートができるかということに関して検討していけるとよい。</li> <li>・アンケートとしての活用のみでなく、次の業務に展開できるような内容での実施可能性について検討できると、保護者にとって繰り返しの入力の負担感を削減したり、教職員のとりまとめに割かれる時間を短縮したりすることにつながると思われる。</li> <li>・実施することの効果により得るには回答率を上げる工夫も必要である。</li> </ul>	<p><b>【現状】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○お知らせ等のメール配信は、ごく一部の一報告の配付物に限られている。</li> </ul> <p><b>【今後の展望】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○保護者に希望を伺うものやアンケート、日程調整のための情報収集等、配付・回収した後、作業展開があるものが、集約した情報をデータ化するのには、アナログ的な作業を挟まず、データベース化できると、業務改善、作業時短に繋がっていくと思われる。安全な個人情報の取り扱い、県のポリシーを踏まえた上で、どのように実践していけるか、また、保護者への配信サービスシステムが、保護者、学校の両方にとってより合ったものを検討又は、構築できると活用が広がっていくと思われる。</li> </ul>

## ●テーマ設定の背景

①-d チーム

### 【現状】

- ・慣例で行っている業務や、やり方を変えることで時間短縮になる業務があるのではないか。
- ・授業づくりや子どもへの支援方法の見直しなど、教員として本来時間をかけたい業務をじっくり行うための時間を作りたい。

授業を考える時間、児童生徒と向き合える時間を  
どのように確保できるか本気で考えたい!

### 研究

### 【ゴール】

教職員から募った

OR6年度の業務改善アイデア

OR7年度の業務改善アイデア

- 他校/他学部/分掌等々と確認し、
- 業務のスリム化達成
- 別の取り組み方の提言

行事、清掃、会計、会議、事務作業等の  
7項目について業務の見直しができた

これからは、今よりも  
子どものことを考える時間を捻出できる!

これからも、業務のスリム化の視点を持とう!

メンバー：徳原、大橋峻一、石上信彦、高井、大野、井澤、山名

## 麻生支援学校 令和7年度研究報告

## ○テーマ設定の理由

教員の最も中心業務は、子どもの学びと成長を支えることである。このためには、子どものアセスメント、指導環境整備、授業実践、評価等、子どもと向き合う時間をできるだけ多く確保することが肝要である。

近年、教員の過剰な労働時間が報告されるようになり、いかに教員の働き方改革を成し遂げるかに耳目が集まっている。

中教審は、平成31年1月25日「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」の答申の中で、いわゆる「教員の仕事の3分類\*」を示した。更に令和7年8月19日には、学校業務の適正化を図っていく上で指針の中で明確に位置づけをして取組をさらに強化していく必要があるとして「『学校と教師の業務の3分類』の指針への位置付け(案)」を示した。

その中に「教師が教師でなければできない業務に専念できるよう」という文言があり、今後この答申に基づき教員の業務は見直されることが推察される。

とはいえ、校内でできる教員の業務改善は、新たな予算や人の配置が必要なことは難しい。そこで、本チームにおいては、令和6年度に行われた業務改善に関する意見の中で、「本当に必要な業務か」「必要な業務だとしたら、できるだけ教員の負担が少なくなる方法はないか」という視点で検討することとした。

私たちが取り組んだ内容は全部で『①会計について、②行事について、③医療的ケアについて、④情報について、⑤部活について、⑥清掃について、⑦引継ぎについて』の7項目である。この7つのカテゴリにおいて、実際に改善を試みたり、改善すべき根拠を調べたりなどした。その内容について一つずつ紹介していく。

## (参考) 「学校と教師の業務の3分類」の指針への位置付け(案)

学校以外が担うべき業務	教師以外が積極的に参画すべき業務	教師の業務だが負担軽減を促進すべき業務
<p>①登下校時の通学路における日常的な見守り活動等</p> <p>②放課後から夜間などにおける校外の見回り、児童生徒が補導された時の対応</p> <p>③学校徴収金の徴収・管理(公会計化等)</p> <p>④地域学校協働活動の関係者間の連絡調整等</p> <p>⑤保護者等からの過剰な苦情や不当な要求等の学校では対応が困難な事案への対応</p> <p>※勤務時間前・下校時刻後の預かり活動を行う必要がある場合は、学校以外の管理体制を構築</p>	<p>⑥調査・統計等への回答(学校への依頼を減らし、デジタル技術を活用しつつ、事務職員を中心に実施)</p> <p>⑦学校の広報資料・ウェブサイトの作成・管理 (学校が行う場合は事務職員等を中心に実施)</p> <p>⑧ICT機器・ネットワーク設備の日常的な保守・管理 (教育委員会と連携を図りながら、事務職員等を中心に実施しつつ、地域の実情に応じて外部委託も積極的に検討)</p> <p>⑨学校プールや体育館等の施設・設備の管理(教師は授業等に付随して行う日常点検を担い、外部委託等も積極的に検討)</p> <p>⑩校舎の開錠・施錠(副校長・教頭に固定せず、機械警備、役割分担の見直し等を促進)</p> <p>⑪児童生徒の休み時間における安全への配慮(地域住民等の支援や、輪番等を促進)</p> <p>⑫校内清掃(児童生徒への清掃指導は、地域住民等の支援を得て、回数・範囲の合理化等を促進)</p> <p>⑬部活動(部活動の地域展開・地域連携を推進)</p>	<p>⑭給食の時間における対応(食に関する指導については、栄養教諭等が対応)</p> <p>⑮授業準備 (教材の印刷など補助的業務を教員業務支援員等の支援スタッフを中心に実施、デジタル技術の活用を促進)</p> <p>⑯学習評価や成績処理 (採点作業等のうち補助的業務を教員業務支援員等の支援スタッフを中心に実施、自動採点等のデジタル技術の活用を促進)</p> <p>⑰学校行事の準備・運営 (関係機関との日程調整や物品の準備等について、事務職員や支援スタッフとの協働を促進しつつ、必要に応じて外部委託等も検討)</p> <p>⑱進路指導の準備 (就職先に関する情報収集等について、事務職員や支援スタッフとの協働を促進)</p> <p>⑲支援が必要な児童生徒・家庭への対応 (専門スタッフとの協働等を促進)</p>

教師を取り巻く環境整備特別部会(第2回)配付資料 令和7年8月19日

## ①会計について

## 改善提案Ⅰ 校外行事の交通費の支払証明書

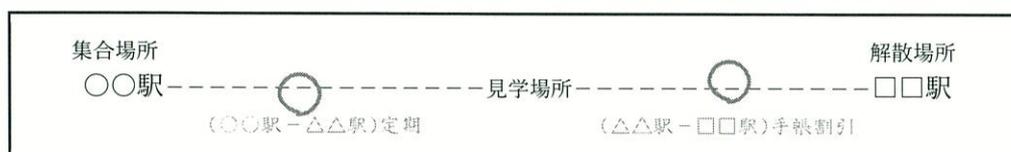
・校外の活動で公共交通機関を使用した際に「支払証明書」を作成していることについて、検討した。  
 〈他校の状況〉

A校	経路の中で定期・割引が適用される一覧表を作成。「証明書」の作成はしていない。
B校	麻生と同じ。
C校	一覧表の作成なし。(事務から問い合わせがあれば回答する)
D校	一覧表の作成なし。
E校	一覧表の作成なし。
F校	一覧表の作成なし。

「支払証明書」を作成し、校長の決裁をもらっているのは1校、決裁をもらう形ではないが、一覧表を作成している学校が1校、他は一覧表を作っていないかった。(1校は事務からの問い合わせに対して口頭やメモで回答) 校外学習の交通費を把握する必要があるのは、就学奨励費のためであり、「証明書」は必須ではない(現に現場実習において、証明書を作成していない)。

そこで、次のように業務改善を提案したい。

- ・校外学習等において、公共交通機関の「支払証明書」は作成しない。
  - ・集合場所から解散場所の利用交通機関の中で、定期や割引がある区間を保護者に記載してもらい、事務に提出する。
- 例;実施案の中で経路を示す部分を保護者に配付し、定期や割引区間に印をつけてもらい事務に提出。



## ②行事について

→【意見1】年度をまたぐ校外行事等の引き継ぎで混乱が起きることがある。学部によって確認事項が異なることもあり、昨年度の記録を遡ってもやるべきことが明確化されておらず、業務内容を探すのにかなりの時間を要する。

【意見2】形態食の提供をしていない食事場所の場合、行事の再調理に時間がかかってしまう。子どもの昼食時間が後倒しになる。

## 改善Ⅰ 「行事ToDoリスト」の整理

・行事のファイルやフォルダ等が、前年度の係によって整理の仕方にばらつきがあることや、遡って業務内容を把握するための時間や労力が多かかってしまう現状について、以下のように改善を試みた。

【①修学旅行(旅行会社有)ToDoリスト】(別添資料1)	
【②修学旅行(旅行会社無)ToDoリスト】(別添資料2)	
【③遠足・校外学習 ToDoリスト】(別添資料3)	を作成した。

A部門/B部門それぞれで、不必要な項目を削除するなどして、使用していただくと良い。時期を仮で入力しているため、各行事の実施日に応じて書き換えて使用すると、タスクと期限を漏れなく、シンプルに管理することができる。

### 改善2「行事の再調理」

・行事の再調理などには、かなり時間と労力がかかり、また安全に活動を進めるために、引率職員を増員することはできないかカリキュラム会議にて提案した。

・再調理も含め、活動全体として人手が足りないという状況なら、しっかりと理由付けを行い各会議で説明し実施案が通れば、人員を増やすことは可能。ただ、食べる人の実態をよくわかっている担任が再調理を行い、応援教員に活動のサポートに入ってもらうようにすることで安全に活動を進められることを確認した。

### ③医療的ケアマニュアルのフォーマットについて

→【意見】現在、ケアマニュアルは他の児童生徒のものを複製して作成している。学校で標準化されたものを作成し、基本はそれに沿うことで間違いもおきづらく、保護者への聞き取りもしやすくなる。個別性への対応は、児童生徒の体調等に応じて標準化されたものをベースに考えていただくと良い。

### 改善1「ケアマニュアルフォーマット」と「(連動した)聞き取りシート」の作成

・初めてケア児と関わる教員にとって、保護者に聞き取るべきことが何なのか把握できていないこともある。また、先輩/友だちのマニュアルの複製や、同じ医療的ケアの内容でも、文言がマニュアルによって異なる現状について、以下のように改善を試みた。

【医療的ケアマニュアルフォーマット】(別添資料4)	
【聞き取りシート】(別添資料5)	を作成した。

聞き取りシートを埋めるようにして、保護者に聞き取りを行う。聞き取った内容をそのまま入力すると、ケアマニュアルフォーマット内の、個別に値が異なる項目に反映される。聞き取りシートをすべて埋めれば、マニュアルのたたき台が完成する。

→ 今後は、フォーマット化するマニュアルを増やしていく。

### ④情報について

→【意見】会議録を校務 PC など、データで取れるようにしたい。

麻生支援学校では、セキュリティのため校務用 PC を机にワイヤー錠で固定しており、開錠しなければ会議の場に持っていくことができない。鍵は情報係が一括で管理しているが、今まで貸出のマニュアル等はなかったため、持ち出しが可能なことや、方法やルールについて周知されていなかった。

### 改善1「校務用 PC 校内持ち出しマニュアル(案)の作成」

鍵の借り方や、校務 PC の取り扱い方法をマニュアル化し、情報係に提案をした。その際に、鍵の所在が明確になることや、使用後の施錠が確実になされているように施錠方法を記載することで、事故につながらないように留意した。

→ 今後は作成したマニュアルを周知していきたいが、セキュリティに関わるため、情報係と相談し、内容を慎重に精査していく。

## ⑤部活について

→【意見】課外活動として部活動を行うのではなく、余暇活動の時間など、教育課程の中で実施できるとよいのではないかと。

→【検討結果】

地域活動のする場合、地域に募集をかける必要がある。募集をかけて、集められない場合、教員が指導することになる。中学校・高校でも部活動指導員として募集を行っているが、中々集まらないのが現状である。教員が引率、練習などに帯同することには変わりはない。

カリキュラム上の中に入れる場合、改めカリキュラムを組みなおす必要があるのと、カリキュラム上で行うとなると、部活とは言い難くなる。現在、分教室と一緒に取り組んでこともあり、分教室との練習ができなくなる。

麻生支援学校の部活動について、研究グループで議論し、他校での取り組み状況を参考にすることにした。活動内容、日程、参加学部、運営体制、特体連の項目ごとに表記した。

〈他校の状況〉

	A校	B校	C校	D校	E校	F校	麻生
部活動の数	2つ	7つ	6つ	4つ	7つ	4つ	2つ
日程	月1	月1～2	7～9月の総合の時間に(カリキュラム上)行う。	週1	月1	月2、サッカー部のみ土曜あり。	バスケット:月4、長期休みも集中して行う。 ランニング:月1,2
参加学部	中・高	高	知的高等部	高・分教室	中・高等部	高・分教室	高・分教室
参加教員	全学部、帯同する月が決まっている。	全職員	知的高等部	高・分教室	全職員	高・分教室	各学部から1～複数人、輪番
特体連	年度によって参加不参加	バスケット	不参加	バスケット、サッカー	サッカー	サッカー、バスケット、陸上	バスケット、ランニング

「授業を考える時間、児童生徒と向き合える時間の確保」という視点で、麻生支援学校(以下、麻生)と他校の部活動運営を比較・分析した。

## 1. 部活動の数について

- 他校は4つ以上あるが、麻生は2つ(バスケット、ランニング)である。
- 部活動を増やすと顧問の教員も増やす必要があり、教員負担の観点から「現状維持」が望ましい。

## 2. 参加する教員(運営体制)について

- 他校では「高等部のみ」や「全学部」など様々だが、特定の学部が偏ったり、全教員が拘束されたりする課題がある。

- b. 麻生は「希望者+各学部の輪番制」を採用しており、教員間の負担が均一化されやすい。また、部活に参加していない教員が学部・学年で教材研究の時間を確保できる可能性がある。

### 3. 部活動の回数について

- a. 他校では「月 1~2 回」で実施している学校がある一方、麻生は「月 3~4 回」に加え長期休みにも実施しており、頻度が高い。
- b. 「時間の確保」という目的だけを見れば、他校のように回数を「月 1~2 回」に削減することが直接的な解決策となる。

#### 改善提案 I

上記のように、「子どもと向き合うための環境整備・時間確保」のためには「活動回数の削減」が有効である。しかし、部活動の有用性についても踏まえて検討する必要があると考える。

##### 【部活動の有用性（顧問より）】

- 生徒のニーズと成長：麻生は回数が多いからこそ練習の「積み重ね」が可能となり、それが生徒の意欲（「部活をやりたい」という声）や、普段の学校生活では見せない姿を引き出している。
- 社会的スキルの習得：目的は大会の成果以上に、競技を通して準備・片付け、挨拶、話を聞く姿勢など、「社会に出た時に生きるスキル」の習得にある。
- 卒業後のコミュニティ：この積み重ねが、卒業生が OB チームで競技を続けることにも繋がっており、彼らにとって家庭や職場以外の重要なコミュニティ（余暇、生活の一部）となっている。

以上の点から、麻生の部活動は生徒の社会的な成長と生活の質（QOL）の向上に大きく寄与していることがわかる。一方で、部活を教えらるる教員（希望者）の不足などの課題もある。また、現状の輪番制の運営体制についても、教員の多様な勤務体制に応じて、学部運営に支障がない範囲で実施していくことが求められている。

以上から、次のような業務改善・再検討を提案したい。

部活動における生徒のニーズと活動の本質的な価値を重視しながらも、安全かつ持続可能な指導・体制作りが課題である。改めて、当該学部及び部活の顧問で、活動回数や運営体制（応援依頼や必要な人数の整理等）について再検討していく必要がある。

#### ⑥清掃について

→【意見】昇降口のタオル敷きは業務アシスタントさんをお願いしたい。

現状 毎日、A部門全体で持ち回り、朝、タオルを濡らし、それを敷く。生徒下校後、洗って干すということを行っていた。そのような業務の一つ一つが積み積み積もって、残業が多くなってしまっていた。

改善 I ①洗えるタイプのしっかりとした玄関マットを購入またはどこかにないか確認する。

②月に1度業務アシスタントさんに洗って干してもらうことができないか依頼する。

結果として、

未使用の玄関マットを確保して、業務さんに洗うこと、干すことを依頼することができて、教員はそれを元の場所に戻すのみまで業務量を少なくすることができた。

## ⑦引継ぎ:給食支援カードについて

→【意見】B高等部の給食支援カードは必須にしないでよいと思う。外部の方に介助に入ってもらっておらず、学年で対応しているため。

現状 配膳は、基本的に学年や学部の教員で行っている。配膳時に量を調節する生徒に関しては、それぞれの学年で、量(2分の1や3分の1など)を示したカードを作成して対応している。また、切り分けるや食事介助、その後の歯磨き等においても、担任を中心に学年の教員で対応しているため、給食支援カードは活用されていない。

改善提案1 全員分を作成するのではなく、外部の方に介助に入ってもらう生徒がいる場合のみ必要に応じて、作成する。

このように、7つのカテゴリで、子どもと向き合う時間を確保するための環境整備について取り組んだ。全校に業務改善についてアンケートを取ると、様々な意見が出てきた。教職員一人ひとり「こうなったらいいのに」と思っている、個人では整備が難しいこともあるのが現状である。研究のチームとして取り組むことで、実行に移し易く、他に発信しやすい側面もあった。実際に、いくつかの業務削減・業務の見直しをすることで、業務に係る大幅な時間短縮になったと考えられる。積み重なる業務の時間が少しずつでも減ることで、本来割くべき“授業づくり”や“支援方法の模索”に時間を使うことができるようになってきた。今回取り組んだ内容は、「改善提案」として提案した意見もあれば、アンケート内から取り組みきれなかった意見もあった。今後も、「子どもたちとの時間のために」いかに現状の働き方をよりよくすることができるかをチームで模索していく研究を続けていきたいと考える。併せて、今回の成果が、今年度で終わってしまわぬように次年度以降にも紡いでいきたい。